

『學研究』第三四号、平成十一年五月。

付記

本論文は、昭和女子大学文化史学会第三回大会（平成十一年六月二六日）において口頭発表したものの一部です。席上その他におきまして、様々な御教示を賜りました諸先生方、壬生本の書写年代について御教示を賜りました福島金治先生、また貴重な資料を御提供下さいました浅沼和男先生、廣瀬芳先生に、心から感謝申し上げます。

オーセンティシティをめぐるホストとゲストの比較
—アラスカ・トリニンギットの観光から—

勝間田 美奈子

一、問題の提起

遙か北の大地へ「本当の文化」を求め、「伝統的」な民族衣装を着た先住民のパンフレットを握り締めたある観光客は、それがパンフレットのなかの世界でしかないと現地で悟った。そして、「どれ」が本当の文化なのか考え始めた。果たして、「本当の文化」とは、誰もが同じ捉え方をするだろうか。

観光の場合は、「誰」の視点から、「何」をもって文化の本質性を決めることができるのか、とサラマウンが述べるように、「文化」そのものの問題を提示している。これまで文化の捉え方は、一元的で固定的なものとするきらいがあった。これに対しサラマウンは、文化とは決して同種類の巨大な一枚岩の概念ではなく、さまざまな文脈の意図に応じた文化要素の選択によって文化の捉え方は異なってくるものとして、文化の捉え方を可変的で流動的な概念と捉えた¹⁾。本稿では、サラマウンのこうした文化の多面的な捉え方を踏まえ、これまで同一視されてきた文化観光における、ホスト（観光される側）とゲスト（観光する側）との「オーセンティシティ (authenticity)」の捉え方を比較することを目的とする。「オーセンティシティ

(authenticity)』とは「本質性、本源性」という意味であるが、本稿では以下「ホンモノ」という記述で述べていく。ただし、その意味は「真偽」や「真実かどうか」を問うものではなく、「何をもちてホンモノの文化とするのか」を問題とするなかで、「ある文化要素の選択によって文化の本質性を決定したもの」という視点で捉えていく。

その具体的な事例として、アメリカ合衆国アラスカ州東南部に位置するシトカ (Sitka) を舞台に、先住民族の一つであるトリンギット (Tlingit) の文化観光(六月、九月の夏期)を検討する。調査期間は一九九七年から一九九八年である。研究資料は文献資料と、筆者のフィールドワークによるものとする。このなかで、ホストは「トリンギットやトリンギットと名乗る人々」とし、ゲストは「自分の居住地以外へ余暇や商用などを目的に訪問して観光施設を利用した人々」を指すこととする。

二、研究史

観光研究における「ホンモノ」の捉え方として、ホスト側では、マッカネルがゴフマン (Goffman) が空間で区分した社会構造の概念を用いて、ホストが演出する「ホンモノ」はゲストの「侵入」の程度に応じて六段階に区分できると述べ、またサラマウンも、ホストの二つの捉え方をどちらも「ホンモノ」の捉え方としてホストの多様な捉え方を述べたが、ゲストの捉え方は検討していない。

ゲスト側では、永渕がゲストの「ホンモノ」像への探求心の背景を検討して一元的な捉え方をし、コーエンはゲストの「ホンモノ」の受け止める基準によって五つに類型化してホストの多様な捉え方をしたが、ホストの捉え方を述べていない。

研究者の視点として、ブーアスティンは観光以前の「旅」をしてきたゲストのみ「ホンモノ」を求めていたとし、グリーンウッドは、ホストの「ホンモノ」の「伝統文化」が観光化によって「商品化」したと述べた。またダニエルは「観光用」でも、ホストもゲストも「ホンモノ」の体験をしているとしたが、これらは研究者の視点でホストとゲストの視点と同一視し、一元的な見方をしている。

ホストとゲストを扱ったものとして、シルバーは、コーエンのゲストの多様な捉え方を踏まえ、ゲストのタイプに応じてホスト側も様々な「ホンモノ」の演出があるとし、ライアンも、ホストやゲストは「観光用」でも「ホンモノ」の体験をしていることを見出したが、ここではホストとゲストの捉え方を同一視している。このなかでエトレントラウトはホストとゲストの視点から、それぞれ段階によって「ホンモノ」の「多様性」があることを述べたが、ここではゲストとホストの捉え方の比較を問題としてはいない。

このように、ホストとゲストという研究のなかで、一九七〇年代から「ホンモノ」の捉え方の多元性を指摘する動きが目立ってきたが、①ホストかゲストのどちらか一方の視点、②ホストとゲストの捉え方の同一視、③研究者とゲストなどの捉え方を混在し、文化を

「ホンモノ」と捉えるのは「誰」の視点なのか、という視点の曖昧さといった研究問題が指摘できる。ここではホストとゲストが、文化の本質性の捉え方に差違があるということを前提にした研究はなされてきていないため、本稿ではホストとゲストの捉え方を比較することとする。

三、シトカのトリングットと観光

アメリカ大陸における先住民の文化圏の一つである「北西沿岸」は、極めて平地の少ない地形のなかで、高緯度にもかかわらず日本海流（黒潮）の影響により温暖な気候を形成し、先住民は採集、狩猟、漁労活動を通して豊富な食料資源を獲得していた。この地域はさらにいくつかの民族に分かれるが、トリングットはこの北西沿岸のなかでもアラスカ州東南部にあたる最北端の民族であり、北はヤクタット湾のコパー川（Copper River）の三角州から、南はカナダのブリティッシュ・コロンビア州北部のポートランド水路（Portland Canal）までの全長約九七〇kmの太平洋沿岸と島々を指す。シトカは、このアラスカ州東南部のなかでも太平洋沿岸のほぼ中央に位置し、シトカ湾（Sitka Sound）に囲まれたバラノフ島（Baranof Island）の西岸に立地している。シトカの人口約九〇〇〇人のうち、二十%が先住民であり、そのほとんどがシトカ出身のトリングットである。トリングットの「伝統的」な社会は、貴族、平民、奴隷という階層があり、富と名誉を何よりも尊ぶ社会の間で

の社会的認知の場（結婚、出産、死など）として、ポトラッチという儀礼が行われる。またその際にトーテム・ポールという、十メートルを超えることがある巨大な彫刻柱を建立したり、様々な木製の工芸品や籠を製作していた。

今日のアラスカは、一七四一年の「発見」以降、シトカを中心にロシア領アメリカの首都として繁栄し、一八六七年にアメリカへ売却された。その後シトカはゴーストタウン化したが、交通経路の発達や旅行関係の出版物などによって、一八八〇年代からシトカで観光がはじまった。一八九〇年代末葉までアラスカ東南部へのツアーは先住民文化で注目され、一九三〇年代には「アラスカ・トートム・ポール」というステレオタイプイメージが固定化した。この間、トリングットは一九〇〇年代までに、宣教師などによって洋服の着装など「文明化」し、「伝統文化」は「廃れていった」。一九六五年にシトカ観光局が設立し、州政府もアラスカ先住民ニューディール政策のなかで観光を重視するようになると、内務省のインディアン美術工芸局（Indian Art and Crafts Board）は、シトカ国立公園（Sitka National Historical Park）内に開館したビジターセンターでアラスカ先住民アーティストのための再訓練プログラムを実施し、トリングットやロシアに関する歴史博物館も設立した。さらに一九六九年に設立した東南アラスカ・インディアン文化センター（Southeast Alaska Indian Culture Center）では、そのプログラムはより洗練した工芸品製作を発展するため、工芸品の製作や実演、

およびその説明ができる性格へと変化した。一九九六年からトリンギットのロバート・サム (Robert Sam) は、シー・アッティカ・ホテル (Shee Atika Hotel) でダイナー・シアターを個人経営で始めた。また一九九七年にシトカの先住民団体である、シトカ・トライブ・オブ・アラスカ (Sitka Tribe of Alaska = S T A) はシトカ・クワーン・ナークアヒディ・コミュニティセンター (Sheetka Kwaaan Naakahidi Community Center) を開館し、トリンギットの「伝統」舞踊を観光客へ披露している。

アラスカ東南部は、特に一九七〇年代から豪華客船 (クルーズ船) のツアーの恩恵を受け、一九八〇年代以降観光会社数も増加した。シトカでは一九九〇年代に年間二〇万人から三〇万人の観光客が到来し、一九九七年においては年間約二七万人が押し寄せた。今日では町の主要なリンカーン通り (Lincoln St.) のほとんどが土産品店である。現在シトカの経済基盤は林業や福祉、漁業などがあるが、観光はそのなかでも重要な位置を占めており、観光産業は長期的視野では増加の傾向をたどっている。

四、ホストの捉え方

筆者が S T A の経営する観光事務所へ赴き、その観光のツアー・コーディネーターの S 氏に「観光でどういうイメージをモットーにしていますか」と質問したところ、S 氏は「ホンモノ性 (authenticity) をみせることです」と即答した。さらに、実際にそこで経営してい

るトライバル・ツアーのパンプレットには、「伝統的」な民族衣装をまとったトリンギットの写真が掲載し、そこに記載されている文章は、以下の通りであった。

「二千年もの古いトリンギット文化の伝統が生きている唄と舞踊はホンモノである」

「伝統的な唄と舞踊はクランの財産」

「ツアーガイドは、ホンモノ性と知識を併せ持つ地元先住民の熟練者や歴史家による」

このことから、トリンギット自身は、観光の場で「伝統的」なステレオタイプのイメージを「ホンモノ」のトリンギット文化であるとしている。このイメージを選択する要因を、A 経済的要因、B 教育的要因、C 政治的要因から以下検討していく。

A 経済的要因 一九七〇年代以降、シトカの「白人」を含めた地域社会全体や、トリンギット自身による ANCSA の影響¹²⁾によって、観光は経済的視点でより積極的、本格的に重視してきた。観光客が実際に資金を投じる「伝統的」な土産品、「伝統的」な催し物を開催する観光施設やツアーが注目され、また雇用の面で観光会社も「伝統性」を要求した。

例えば観光会社のうち、S T A は「ANCSA でトリンギット自身による経営が迫られるなかで、天然資源の産出しないこの地域での観光のもつ経済的な役割は重要である」と述べていた。そこではトライバル・エンタープライズ (Tribal Enterprise) という機関が

ナー・カヒデイ・コミュニティセンターで「伝統的」なトリングिटの舞踊を披露したり、トライバル・ツアー (Tribal Tours) で「伝統的」なトリングिट文化のツアーを組んでいる。

また観光施設での雇用でも、インディアン文化センターやシエルドン・ジャクソン博物館でそれぞれ三、四人の実演者、ナーカヒデイ・コミュニティセンターで十五、二十人の舞踊者が「伝統性」を持つことを要求されている。

さらに個人経営でも、「伝統文化」の第一人者であるサムが自ら「語り部」となって、トリングिटの「伝統的」な世界を観光用として語る「ダイナー・ショー」を始めた理由も、サムの関係者によれば経済的な理由からである。またあるトリングिटは、十年前に職がないという経済的な理由から土産品店を開き、友人に「伝統工芸」を教えてもらって自分が製作した製品を売っていた。

このように、観光での経営や雇用機会は増加が続けるが、観光客が実際に資金を投じる「経済的」な価値のある「伝統的」なものを重要視しなければならず、トリングिटはますます「伝統的」な技術や知識を要求された。

B 教育的要因 一九六〇年代からアメリカ合衆国本土での黒人公民権運動の高揚が先住民運動に発展し、「伝統文化」の「復活」が世界各地でみられるようになる。シトカでも一九七五年に今日のシトカ・トライブ教育プログラム (Sitka Tribe Education Program) のもととなる、ANB教育プログラム (ANB Education Program)

が始まり、トリングिटの「伝統文化」が「復活」した。これらの教育活動を通じて、「伝統文化」を学ぶ若者が増加するとともに、トライブ全体の活動へと発展し、その延長に観光の場が組込まれているのである。

例えばSTAのナー・カヒデイ・ダンサーズは四つの舞踊グループから成るが、STAのツアー・コーディネーターのS氏は「もちろん観光以外にも文化はひきつがれているが、高校生までの若年グループであるガジャ・ヒン (Gaja Heen) の若い世代は、春期や冬期にANBホールで学んだ舞踊を、夏期にシトカ、ワシントン、ハワイの観光で披露することでトリングिटの文化を観光客と分かち合えることができる」と述べ、観光でのトリングिट内外の文化伝達の重要性を強調していた。そして同時に観光に着手した「民族的」な理由として、「これまでシトカに多く残るロシアの観光が重視されてきたので、きちんと先住民文化をみせたい」とも述べていた。またトライバル・ツアーのパフレットにあるように「生き方を理解してほしい」「外からみるだけでなく、一緒に参加してトリングिटの文化を体験しよう」という語句や、ナー・カヒデイ・ダンサーの舞踊が行われた後、一九九七年に比べて一九九八年には「舞踊者への質問時間」が設けられたように、一般の観光客に対してトリングिट文化を「娯楽」でみることから一民族としての理解を深めてもらうという働きも持っている。観光に関する人類学的な最大の問題は、そこで「原始的」なステレオタイプのイメージの再

生産の場にもなることであるが、ホスト自身が民族のアイデンティティとしての自民族の誇りを示し、自己の文化を理解してもらうという積極的な場にもなるのである。

他にも、筆者がトリリングットに観光施設などで働く動機や「伝統文化」の学習法を調査した結果、次の通りであった。

- ・彫刻師(男) 彫るのが好きだから彫刻師になろうと思った。独学のほかは、父母からの知識と本(民族誌)から学んだ。
- ・彫刻師(男) 彫るのが好きだから彫刻師になった。独学で、シエルドン・ジャクソン大学などの博物館で作品をみたり、知識のある古老に尋ねたり、本(民族誌)で勉強した。
- ・彫刻師(男) 彫るのが好きだから彫刻師になった。八才から彫刻を始めたが、周囲はだれも「伝統的」知識を持たず、自力で本(民族誌)を読んで学んだ。
- ・舞踊者(女) 舞うのが好きだし、祖先と舞いを通じて触れ合うことができるから舞踊者になろうと思った。周りの人が知らないで、子供の時にシトカ・トライブ・教育プログラムで習った。
- ・ビーズ細工師(女) 十二才の時に叔母から教わった。もともと好きではなかったが、次第にビーズ細工が好きになった。自分の息子たちにも教えるつもりである。
- ・ビーズ細工師(女) 七才の時にシトカ・トライブ教育プログラムで習った。

このように、観光は「伝統的」な教育活動の一環の場であると同時に、観光客に「伝統文化」を理解してもらう機会や、「伝統的」な教育が将来観光での実演者などの雇用で有利になったり、それが自らの生活におけるポトラッチなどでも生きているのである。

C 政治的要因 一九七一年にANCSAで成立したアラスカ先住民の地域法人は先住民権がなく、連邦政府はインディアンの「トライブ」⁽¹³⁾とはみなしていない。アラスカ先住民にとって土地は、経済的な目的や生業活動、そして「伝統文化」のために必要であり、土地をめぐる権利を拡大したい方向であるが、現在は「トライブ」の土地ではないので、一度土地が拡大したら税がかかけられ、結局は土地をめぐる権利が消滅してしまうであろうと危惧している。しかし一方で、一九三四年のIRA (Indian Reorganization Act) では、地域の村の先住民組織であるトライバル・ガヴァメント (Tribal government) を「トライブ」として認めている。ここで、現在アラスカ先住民の地域法人は先住民権を消滅しているもの、トライバル・ガヴァメントを自治政府として認めるIRAが認められれば、先住民権は消滅せず、土地などをめぐる「特別」な権利が得られる可能性が再びでてくるのである。一九九三〜九四年に内務省は、アラスカ先住民のトライブをアメリカのほかの四八州のトライブと同一と認める一方で、地域法人をトライブとは認めず、ANCSAで譲渡された土地を、自治政府を持つインディアンの土地ではないとした。しかし一九九五年にホーランド (Russell Holland) 判事は

(Venetie 判決)、アラスカのトライブは ANCSA で先住民権を放棄しているため、いわゆるトライブとは認められず、ANCSA で成立した法人はアメリカのほかの州とは別の新しい自治政府でもあるとした。そしてその後アラスカのトライバル・ガヴァメントをいわゆる政治的な権限がないとした。¹⁴⁾

こうしたなかで、シトカの観光でトリンギットが「伝統性」を強調するのは、ANCSA の影響によって、「トライブ」としての政治的な戦略のなかでのアピールであると捉えることができる。トライバル・ガヴァメントであるシトカ・トライブが経営するのは、「伝統的」なトリンギットのイメージである。それは、シトカで唯一トリンギット文化観光を主眼とするツアーを催し、シトカで唯一の先住民団体による観光団体であることから示唆される。

これら観光での「伝統性」は、トリンギットが実際にそれを「ホンモノ」とみなしているかどうかは問題ではなく、「伝統品」を暗示させる一種のブランド化した「個人名」の明示など、いかに観光客に分かり易いように「伝統性」をアピールし、「ホンモノ」の文化であることを強調できるかが問題なのである。「観光用」としかみられていない「現代的」なポスターカラーを使って配合する青緑への個人的な「ホンモノ」のこだわり、「白人」の「伝統的」な民族誌も、「人類学者はトリンギットでないからすべては信じられない」と捉え、「世界が変化するようにトリンギットの文化も変化するのは当たり前」「男女分業からの変化は、男女が平等になって良

い事である」というように、観光イメージとは違う所で「ホンモノ」のトリンギット文化の在り方がある。その意味で、トリンギットは観光で、山下のいう「演出」¹⁵⁾をしているのである。

五、ゲストの捉え方

筆者がシトカにおいて、様々な地域からきた観光客（二〇代から七〇代までの男女四二人）を対象としたインタビューでは、「トリンギット文化のなかでホンモノと感ずるのは何か」という質問に対し、「伝統的」な面と「文明的」な面の双方で回答があった。¹⁶⁾

「伝統的」なイメージ 「伝統的」な面で「ホンモノ」と感じた具体的な対象は、以下の通りであった。

- ・ 土産品—木製彫刻品（儀礼用の仮面など）、籠類、銀製プレート、スレット、実用品（としてみる籠など）
 - ・ 観光施設のアトラクション—展示、舞踊、実演
 - ・ サムのディナーシアター
- 土産品では「先住民の手作り」という点が目立ち、明らかに工場で大量生産されたキーホルダーなどは一貫して「ニセモノ」とみなしていた。また観光客が実演者に先住民かどうか、何の紋章なのかをよく質問して「伝統的」な面を確認し、追求していた。さらに、より「伝統性」の基準が厳しい観光客は、観光世界の「伝統性」を、
- ・ ホンモノの文化ではなく、ぬげがらである。
 - ・ 先住民が製作しても「観光用」はニセモノであり、「白人」

が友人のために「魂」を込めて製作した彫刻のほうがホンモノである。

というように「観光用＝非伝統的」と想定し、より「純粹」な「伝統性」を求める。ロバート・サムのディナーシアターは、予約を要する少人数制で、ポトラッチ形式によってトリンギットの神話や自己の「インディアン」として生きてきた体験など、「伝統的」な語りをするが、その「観光用」っぽくない、先住民だけの限られた世界を「ホンモノ」として「演出」することで、観光客がほかよりも高く「ホンモノ」と認識している。ある観光客も、「純粹」な文化を観光で「売り物」にしてしまっていることへの危惧をみせた。

・サムの語りは非常に感動した。貴重な体験をしたよ。だけど、いいのだろうか。ボブがそれ（語り）を売り物にするのと、それを許しているシトカの地域社会…。

これら観光客が「伝統的」な面を「ホンモノ」とみなす背景として、まずトリンギット文化が“uncivilized people”から、一九二〇年代のユートピア思想や、ボアズらの人類学的研究などによって、国家によって法的に認められた「文化」と認識されるとともに、文明以前の“timeless”“unchanged”という「伝統性」がトリンギット文化の本質として固定化しステレotyp化したためである。米田によれば、観光に付与される意味は観光客の内的主観によるが、個人レベルを超え、社会的事実という現象となるには観光に関わる者以外の「主観的」な意味を持つコミュニケーション・メディアとし

てのシンボルが必要であるという⁽¹⁷⁾。そうでなければ、観光客は一体どれをもって「ホンモノ」の体験をしたかという尺度が測れないからである。従って、「ホンモノ」と感じた多くの「手作り」の土産品には、「先住民」としての「個人名」が明記されており、またボブ・サムのディナーシアターも、ボブがシトカをはじめ国際的な「伝統的」先住民として著名な人物ということがあった。

また観光とは、観光客にとってどれだけ現実世界から逃亡できるかでその目的を果たす。例えば、筆者がシトカの観光客へ観光目的をインタビュした結果、四二人のうち余暇や娯楽三五人、親戚などへの訪問六人、仕事一人であった。一九八八年の Data Decisions Group による調査でも、シトカ観光者一三八〇〇人のうち、八五%の一七二〇〇人が観光目的として余暇や娯楽であったように⁽¹⁸⁾、観光客の観光動機は、「余暇や娯楽」が主体をなしている。この「余暇や娯楽」の観光目的は、実にグレイバーンの観光における聖俗論⁽¹⁹⁾を暗示しており、例えば観光客も「仕事で疲れ、気分をリフレッシュしたくて娯楽を楽しむため」「本当の旅がしかなかったから」というように、俗なる毎日の仕事から脱出し、聖なる観光を経験し、再び俗なるもとの場所へ戻っていくという、聖と俗の区分やその繰り返しのシステムが認識できる。この意味で、観光とは「現実」との対比という性質を持ち、トリンギット観光の「伝統性」は現実逃避を助ける手段であり道具なのである。

「文明的」なイメージ ブーアステインによれば、観光客は観光に

行く前から観光イメージをすでに形成し、観光とはそのイメージを
確認し追求する作業であり、その意味でブーアステインは観光を
「擬似イベント」と呼んだ。またマツカネルやシルバーも、観光客
は「文明」からの逃亡者として、文明化以前の“primitive”なイメ
ージを求めるものだとした。しかし、観光客は前述のような“timeless”
“unchanged”とこうステレオタイプのイメージのみを抱き、それを
確認するだけではない。実際に観光客の多くは、「学校で先住民の
歴史を学んだ」「先住民が現代的な生活を送っていることは知って
いる」というように、先住民が「文明的」な生活をしていること知
っており、シトカへ初めて行ってもそれまで抱いていたイメージと
の差違はなかったと述べていた。その理由として、まずシトカの観
光客の教育水準は大学までの学歴者が観光客全体の約五〇%である
こと、観光客の出身地では全体の約五〇%以上がカリフォルニアな
どアメリカ西部地域を中心としているため、学校での学習や身近な
先住民の例、写真集などマスメディアからの情報などから先住民の
現実の生活を知っていたからである。

さらに観光客は、現地での観光スポットで「伝統的」な観光世界
だけを体験できるわけではない。それはシトカの観光が模型文化で
はなく、観光スポットの集中するリンカーン通りが多くのトリンギ
ットの居住域に密接し、観光客がシトカを観光する時点ですでにト
リンギットの「現実」に直面しているからである。そして、シトカ
を訪れる多くの観光客は、同時にアラスカ東南部のジュノーなどシ

トカ以外の町も訪れており、そのなかで「文明的」な生活を送って
いるトリンギットが、「伝統的」な観光イメージをアピールし、観
光施設で働き、観光用の土産品を製作している様子を観光客が何度
も確認することで、その光景自体がステレオタイプ化しているの
である。

こうした観光客が、トリンギット観光で、「文明的」な現実の面
で「ホンモノ」と感じていた側面もあった。

・観光の土産品でも、もし先住民が心をこめて製作したり、そ
の製作の行為に民族の誇りを感じているなら、それもホンモ
ノになると思う。その製作の過程を知っていれば……。

・観光用であれ、「伝統的な」儀式用であれ、それが心をこめ
たつくったものならばどれもホンモノである。

ここでは「観光用≠非伝統的」という単一な図式を脱している。ま
たある観光客は、パイオニア・ホームにいるトリンギットの古老と
対談し、「人間としてのトリンギットに触れ、ホンモノの体験をし
た」と述べ、トリンギットを「一人の人間」として認識していた。
さらに観光客は、観光でも「トリンギット」を「無粋」に写真を撮
ろうとはしないし、実演者が製作する製品に対しても「(製品の)
写真をとってもいいですか」と断り、観光客という立場を利用した
行動をとってはいないのである。

六、まとめ

本稿では、アラスカ・トリングットの観光という一つの対象（文化）に対して、ホストとゲストという異なった二つの視点から、その本質性“authenticity”（＝「ホンモノ」）の捉え方をそれぞれの背景から比較した。その結果ホストは「伝統的」な面のみである一方、ゲストは「伝統的」と「文明的」な面で「ホンモノ」を捉えており、両者の間に捉え方の差違があることが指摘できた。

ホストからみれば、「伝統性」は経営や雇用などで経済的な利益を享受できると同時に、「伝統的」教育の一環の場や、「伝統的」な権利獲得という政治的戦略などもその背景にある。

ゲストからみれば、現実逃避から異世界を求めた観光世界の「伝統的」な面を求めると同時に、現実世界の「文明化」な面も観光前のイメージや、現地での体験のなかで常に付随しており、双方に「ホンモノ」を意識していた。

文化には、様々な要素がある。サラマウンは、各々の決めた問題意識のなかで特定の状況のなかにそれを「導入」したとき、それを「ホンモノ」と捉えるとして、文化とはただの精神的な文句のなかに押しこめただけであると述べた。どれを「ホンモノ」と捉えるかは、そのときどきの視点や背景の要因によって幾通りにも異なった捉え方があり、トリングット観光でホストとゲストが選んだ要素も、どちらも「ホンモノ」の捉え方なのである。これからの課題として、

ホストやゲストのそれぞれのなかでの個人差や時期差の違いによる、「ホンモノ」の多様な捉え方の検討も必要である。

トリングット自身が「ホンモノ」とみなしている部分と、観光客が「ホンモノ」とみなしている部分は必ずしも一致するわけではない。ホストは視野を拡大し、ゲストの多様な捉え方を考慮することで、例えば大量生産の「観光用の土産品」に製作過程での「先住民の思い」をつづったプレートを添えることで、購入者が増加するかもしれない。また、観光客に目の前でトリングット自身の「ホンモノ」に遭遇している事実気づかせることで、観光客が違った見方をするかもしれない。そして、筆者の調査では「伝統的」な「ホンモノ」を求めていった観光客が、イメージと現実のギャップに戸惑いつつも、「何がホンモノの文化なのか、考えさせられる」という反応も見られた。この事実には、観光地や観光産業が今後どう対処していくべきかが、本研究の成果と実践であると信じている。

註

- (1) Salamone, Frank. A. (1997) Authenticity in Tourism: The San Angel Inns. *Annals of Tourism Research* 24-2. (pp.305-321). pp.306, 318-319.
- (2) MacCannell, Dean. (1973) Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings. *American Journal of Sociology* 79-3. (pp.589-603).

- (3) Salamone, Frank. A. (1997)
- (4) 永渕康之 (1996) 「文化イメージの受容と価値の生産」『観光の二十世紀』(石森秀三編) (pp.69-79) ドメス出版
- (5) Cohen, Erik. (1988) Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research* 15-3. (pp.371-386).
- (6) ブーアステイン D.J. (1995 [1964]) 『幻影の時代』(後藤和彦・星野郁美訳) 東京創元社
- (7) Greenwood, Davydd. J. (1989) Culture by the Pound: An Anthropological Perspective on Tourism as Cultural Commoditization. *Hosts and Guests* (ed. V. Smith.). (pp.171-185). University of Pennsylvania Press. Philadelphia.
- (8) Danniel, Yvonne. Payne. (1996) Tourism Dance Performances: Authenticity and Creativity. *Annals of Tourism Research* 23-4. (pp.780-797).
- (9) Silver, Ira. (1993) Marketing Authenticity in Third World Countries. *Annals of Tourism Research* 20. (pp.302-318).
- (10) Ryan, Chris. (1997) Carving and Tourism: A Maori Perspective. *Annals of Tourism Research* 24-4. (pp.898-918).
- (11) Ethrentaut, Adolf. (1993) Heritage Authenticity and Domestic Tourism in Japan. *Annals of Tourism Research* 20. (pp.262-278).
- (12) アラスカ先住民権益措置法 (Alaska Native Claims Settlement Act)。一九七一年にアラスカ先住民と連邦政府が交わした条約で、「先住権」の消滅の代わりに、先住民には4400万エーカーの土地と九・五億ドルの補償金が支払われ、アラスカ先住民基金が成立した。それをもとに地域法人と村法人が成立し法人化した。政府はこれら先住民会社への経済政策などに加担せず、先住民が自身で経営する方針である。
- (13) 現在「トライブ」の概念は、①「先住民族」一般の総称、②トリンギットやハイダなど言語学的区分による民族の総称、③トリンギットのなかでもシトカなど地理的区分による民族の総称などさまざまなレベルで使用されているが、本稿では③の意味で用いる。特に「シトカ」のトライブの意味は、人類学的区分と法的区分はほぼ一致するため、双方の意味を含めるものとする。
- (14) Rude, Robert. W. (1996) *An Act of Deception*. Salmon Run Publishing Company. Anchorage. pp.16-18.
- (15) 山下晋司 (1992) 『劇場国家』から『旅行者の楽園』へ』『国立民族学博物館研究報告』17-1 (pp.1-34)。
- (16) ただし、これは一人一人がどちらかのイメージをはっきりととったのではなく、一人が双方のイメージをとる場合もある。
- (17) 米田和史 (1996) 「観光対象」『現代観光研究』(pp.198-208) 嵯峨野書院 pp.201-205.

- (18) Data Decisions Group, Inc. (1988) *Sitka Tourism Market Study and Development Strategy*. Sitka Convention and Visitor Bureau and City and Borough of Sitka. Juneau. p.75.
- (19) Graburn, Nelson, H. H. (1989) *Tourism : The Sacred Journey. Hosts and Guests* (ed. V. Smith.), (pp.21-36.)
- (20) Data Decisions Group, Inc. (1988) pp.75-78.

現代の木地屋の集落が抱える諸問題に関する一考察

—長野県木曾郡南木曾町漆畑の場合—

日 野 由 希

はじめに

わが国の高度経済成長は、都市に飛躍的な発達をもたらした反面で、村落には大きな打撃を与えた。都市での高度成長は多大な労働力の需要を生んだが、逆に村落、例えば農村ではその生業において機械化が進み必要な労働力が減少した。山村でもエネルギー革命により木炭や薪の需要が減少したことから同様であった。そして、高度経済成長により村落における労働力は都市へと移行し、全国的に都市への通勤圏外で教育や医療、道路の整備など生活環境の整備が遅れていた村落では、著しく人口が減少し大きな変貌を遂げた。

本稿では高度経済成長以降多様化した村落の中でも著しい変化の見られた山村に注目、その中でもとくに伝統的に山中で生業を営んできた木地屋に着目する。現在国内において木地業で生業をたてる唯一の集落は長野県木曾郡南木曾町漆畑であり、隣接する木曾郡山口村山口と下伊那郡清内路村堀田とともに「南木曾ろくろ細工」という漆器の伝統的工芸品の産地として地場産業を担っている。

ここで木曾郡山口村山口で伝統的工芸品産地として指定を受けているのは漆器業を支える塗師屋である。また、下伊那郡清内路村堀